

# 良田地区

古墳時代～平安時代の遺構、遺物を発見！！

## 良田平田遺跡

よしだ ひらた いせき

平安時代の溝から遺物が続々！



昨年度の調査で見つかった平安時代（約1200年前）の溝の続きを掘り下げています。この溝は東端が浅い池状になっていて、そこから須恵器の壺や木製品の槽（浅い長方形の容器）が出土しました。槽は長さ約70cm、幅約30cmもある立派なもので、ほぼ完全な形で残っていました。昨年度の調査では溝の底から墨書土器（墨で文字が書かれた土器）が多数出土しているため、今後の調査が楽しみです。

## 良田中道遺跡

よしだ なかみち いせき

古墳時代の水路を発見！



調査区周辺は青々と稲が育ってきたけど、古墳時代から、ずっと田んぼがひろがっていたんだね。



溝の肩口にはりつくように土師器の甕が出土しました。

古墳時代前期（約1700年前）の溝が3本見つかりました。2本は谷を横断するように平行して、もう1本は調査区東側の尾根に沿うように流れていました。これらの溝は田んぼを耕作するための水路と考えています。溝が埋まった後もほぼ同じ位置に畦が築かれていることから、同じような区画の田んぼが広がっていたようです。現在はその下の地層を調査中で、谷を蛇行する自然の流路が見つかりました。田んぼが広がっていた古墳時代前期以降とは、大きく景観が異なっていたようです。

# 鳥取西道路の遺跡を掘る！

第40号 2012年8月24日

発掘調査で見つかる昔の水田は、なぜどれも規模が小さいのでしょうか？



### 昔の田んぼからわかる古代の技術

東桂見遺跡で見つかった水田（古墳時代前期、4世紀頃）を例にとると、ひとつの水田は、およそ2m×4m、わずか畳4枚分の広さにすぎません。

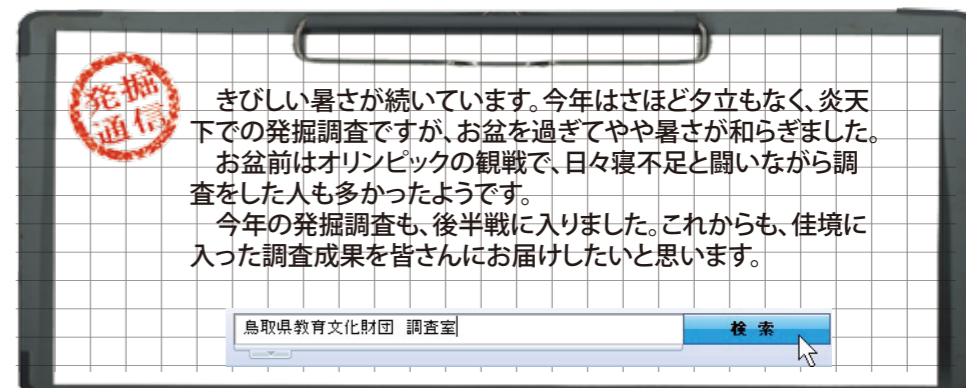
これは、当時の灌漑技術、すなわち水田全体に水をはる技術が十分に発達していなかったためです。現在は、電動ポンプや、コンクリートの農業用水路など、十分に発達した灌漑技術のもと、大きな水田全体に水をいきわたらせることができます。

しかし、当時は自然の川から水を引き、水路も土と杭や木柱を使った簡素なものでした。そのため、水田一つに流し込むことができる水の量も限られ、面積が小さくなったのです。



一方、世界に目を向けると、ほぼ同じ時期のローマ帝国では、山から山へ水を渡すため水道橋という、水路を乗せた橋がたくさん築かれています。国や地域によって、大きな技術の差があることがわかります。

(財)鳥取県教育文化財団  
調査室  
美和調査事務所  
〒680-1133  
鳥取市源太12番地  
(旧鳥取湖陵高校美和分校内)  
TEL: 0857-51-7553  
FAX: 0857-51-7550  
メールアドレス:  
tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com



# 東桂見遺跡

ひがしかつらみいせき



でいたんぞう  
泥炭層にパックされた昔の水田跡



水田跡検出風景



東桂見遺跡では、トップページでお伝えしたように、昔の水田跡がみつかりました。水田は3m幅程度の大きな畦<sup>あぜ</sup>を境にして、その両側に小さな畦を巡らせて一つの田んぼを作っています。一つ一つの田んぼの大きさは、およそ2m×4mと小さいものです。大きな畔の上からは、甕<sup>かめ</sup>の破片がほぼ一個体分出土しました（下の写真）。

この甕は現在の研究成果から、4世紀前半頃のものと考えられます。水田が営まれた時期もほぼこの頃と考えられます。

この時期は、調査地付近にある桂見墳墓群で有力者の墓が次々に築かれていった時期にあたります。

また、さきの水田跡の下からも、少し古い時期の水田跡がみつかりました（下の写真）。



畦の方向はよく似ていますが、大きな畦の脇に水路があったり、小さい畦の位置が微妙に違っていたりと、水田の形に変化がみられます。大きな畦脇の水路からは、3世紀中頃の土器が出土しました。このことから、東桂見遺跡では、すくなくとも3世紀中頃から4世紀前半までの数十年間にわたって水田稲作がおこなわれていたことが分かりました。

# 高住地区



縄文土器や弥生時代の建築材が大量に出土！！



## 高住井手添遺跡

弥生時代の建物の部材が大量出土！



弥生時代中期(約2100年前)の溝の護岸施設<sup>ごかんしせつ</sup>の調査を進めたところ、盛土の下から木材がびっしりと並んで出土しました。その数およそ500点！

そのほとんどが加工された角材や板で、もともとは建物の部材として使われていた可能性が高いと考えています。

今後、これらの木材を詳しく調べて、当時の建物の姿を明らかにするための手がかりをつかみたいと思います。



長さが4m以上もある角材も出土しています。あまり厚みがないので、柱や桁・梁ではないようです。今のところ屋根の部材の可能性を考えています。



きれいな長方形に製材された板です。長さは約3m、厚さは約1cm。壁の板でしょうか。

## 高住牛輪谷遺跡

縄文土器が出土しました！

高住牛輪谷遺跡では、地下約3mの深さから、縄文時代後期(約4000～3000年前)の土器片がたくさん見つかりました。

土器片のいくつかには、「磨消縄文<sup>すりけしじょうもん</sup>」という文様が施されていることから、縄文時代後期でも前半のものであることがわかりました。また、文様を施さない無文の深鉢<sup>ふかばち</sup>1個分の土器片がまとまって見つかっています。この土器の底には土器作りの時に敷いていた網代の痕<sup>あじろ</sup>が見事に残っていました。



「磨消縄文」を施した土器片です。線で描いた文様と縄を転がしてつけた文様が組み合わさっています。



無文の土器が出土した様子です。まるまる1個分の破片がそろっています。バケツ形の深鉢に復元できそうです。



左の土器の底のアップです。模様のように見えるのが網代の痕です。網代とは竹や木のヒゴを互い違いに編んだもので、敷物などに使われていました。